

# 国語科におけるリテラシーの授業 続

## — 中学2年生の古典の授業から —

金子 直樹

2006年度から当校では「新サイエンスプログラム」と題して、「リテラシー」をキーワードとする全校あげての研究開発を行なっている。国語科では従前から、教科の指導内容そのものが「リテラシー」育成を目指すものであるが、この機会に改めて「リテラシー」という考え方を軸にして授業を構成してみた。題材として取り上げる「古典」は、扱い方によっては内容主義や尚古趣味に陥りがちなものであるだけに、むしろ「リテラシー」の本質である「批評」という面を強く意識しておかなければならない。その「批評」という思考過程を組み入れやすくするために、「比べ読み」の活動を用いて授業を展開した。

以下は、第37回中・高等学校公開研究会で公開授業として実施したものに基づく記録である。また、昨年報告「国語科におけるリテラシーの授業— 中学1年生の古典の授業から —」（本研究紀要47巻2007.3）の続編である。

### 1. はじめに—問題の所在—

生徒の「読み」には様々な型がある。作中登場人物に心情を同化して喜びや悲しみを追体験する、感情面を深める「読み」もあれば、作品を俯瞰的に捉えて筆者の創作過程を再構築するような、理知的な「読み」もあろう。いずれの場合にしても生徒は、作品世界や作品そのものを具体的な場として、作中人物や作者を対象物にして、自己を問うているのである。授業では、そのような場や対象を幅広く深く仕組むことで、生徒の自己への問いかけを促すことをめざしているのである。

しかし日々の授業を自ら振り返ってみると、あるテキストを終えた途端にそれで「おしまい」、ということになっているのではないだろうか。むしろ作品世界や作者の対象化を精緻に行なうほどに、本来問うべき生徒の自己が切り離されて希薄化しているのではないか、という反省・懸念である。そもそも問うべき「自己」とは、という問題もあるが、授業での「読み」の焦点が作中人物や作者に当たってしまうと、対象が主体にすり替わってしまう畏にかかりやすいように思う。

問題は、「読み」の構えの方向であろうと思う。それは決して放恣な解釈をするのではなく、テキストを正確に理解することから始まるのであろうが、「昔の人はすごかったんだね」「争乱の時代での人間の生き方が分かったよ」でおわりにするのではなく、自分はなぜそのように理解するのかを追跡して、テキストと自分との関係を意味づけることで自己を問う契機となるように考えたい。特に古典の場合、正確な理解に至るまでの時代状況や概念の把握などの問題点もあるが、それ故に一層心がけておかないと、対象が主体にすり替わる「読み」に止まってしまいかねない。授業での中心課題は、少なくとも自己を

問うという「読み」の構えを経験することにある。

### 2. 「説話」の授業

「物語の内容を正確に読み取る」という段階から、「どのように読み取っているのかを自ら意識しながら読む」という段階への、「読み」の進化を経験することをねらいとして、「説話」による比べ読みの授業を行なった。中心教材を『宇治拾遺物語』より「十、秦兼久、通俊卿に悪口のこと」(A)として、補助教材に『今物語』「四一、花こそ」(B)、『袋草子』「上、雑談」の藤原通俊に関する記述(C)を用いて、秦兼方が「後拾遺和歌集」入集を撰者藤原通俊に拒否された出来事に関する記述を読み比べた。

対象が中学2年生であることを考慮して、教材はABCとも全文口語訳付プリントを作成し、全5時間で実施した。1、2時間目は音読と、主にAについての内容整理、3、4時間目はBCとの共通・相違点の整理を行い、課題(家庭学習)で書かせた文章をもとに、5時間目にまとめを行なった。

授業の実際の様子は、以下の生徒「学習記録」を参照。(下線は引用者による。以下同じ。)

#### 生徒学習記録(4時間目) (C組KA)

前回の授業では、ABCの三つの話の共通点を見つけました。今回の授業では、三つの話の違いを見つけました。Aの物語では兼方に?、Cの物語では通俊に焦点が当てられていました。Bの物語では兼方に焦点が当てられているけれども、「ちょっと厳しすぎる」という批判もされていました。

ところで、今回読んでいった中で、Cの文章に「耳を

尊び目を卑しむる誤りか」という言葉が出てきました。「昔はよかったけれども、今はだめだ」という間違った考え方、という意味ですが、これは今でも時々聞く言葉です。初め読んだ時には意味が分からなかったけれども、「昔」は耳でしか聞けない、つまり実際のことを知らず噂でしか知らないのに対して、「今」は目で見ることができるために、よいことばかりでなく悪いこともたくさん見えてくるのではないかと思います。『後拾遺集』を『小鯨集』と呼んでいる理由が分かって、昔もワイロがあったんだと驚いたけれども、やはり「今」の悪いことが見えていたんだと思います。

同じ一つの出来事でも、書く人によって書き方がいろいろ変わることが分かりました。読んでいて、「実際、兼方と通俊とは、いったいどんなやりとりをしたのだろうか」、と思いました。

#### 生徒学習記録（5時間目）（B組SM）

今回は、「兼方の悪口」を通して、出来事を作り出す力と、考えを深めさせていく力について考えました。実は私は、AとCでは兼方は通俊へ悪口を直接言わずに侍たちに言っているから卑怯で、Bでは本人に直接言っているからいさぎよくて良いと思っていた。けれど、他の人の意見を聞くと、自分とは正反対の意見の人もいた。「兼方は随身の地位なのに、大人物の通俊に悪口を言うのは失礼だ」とか、「随身の地位でしかない人だから、論理が正しくてもどうしようもない」という意見を聞いて、それはそれでなるほどと思う部分もあった。他の人の意見は、自分が気づいていなかったことに気づけたり、「へえー」って思うことがあったりするから、面白い。

ある出来事を、語り手が自分なりに焦点をあわせて、それを読み手がまた自分なりに焦点をあわせて、自分の好みに合わせてどんどん絞っていくのか、それとも、自分の好みに合わせてどんどんふくらませていくのか、どちらだろうか。私は、どんどん絞ってけずって鋭くしてゆく方だと思う。

1, 2時間目の授業では、A『宇治拾遺物語』末尾の一文「治部卿うちなづきて、『さりけり、さりけり。物な言ひそ』とぞ言はれける。」の解釈＝通俊は、自らの過ちを認めて降参し苦笑しているのか、それとも、自らの錯誤を指摘されたことを怒り立腹しているのか＝を生徒へ問いかけることを切り口として、読者（生徒）がそのように捉える根拠を、語り手の視点と関係づけながら、本文の表現に即して考えさせた。

3, 4時間目では、さらにB『今物語』C『袋草子』という別の語り手の視点を加えて、「読み」の軸を増やして本文を読ませ、考えさせた。生徒の学習記録に見られる記述は、その過程で生じる、「読み」を深めてゆくため

の疑問であり、自問である。

以上のような読解を経た後、課題（まとめ）として、1『兼方の悪口』という出来事を、語り手はどのように表わしているのか、2『兼方の悪口』という出来事を、私たちはどのように受け取っているのか」という内容でそれぞれ書かせた。5時間目は、その内容をプリントにして書いた生徒本人に読ませ、クラスに紹介し還元することで、授業全体のまとめとした。以下にいくつかを抜粋して紹介する。

#### 生徒まとめ1-1（C組NR）

A『宇治拾遺物語』は兼方派、B『今物語』C『袋草子』は通俊派である。Cの文章からだ、平安時代の世間では、通俊の『後拾遺集』は、『古今集』のように序文が格調高くない、ひいきをしている、ワイロをもらって歌を撰んでいるなどという噂があったみたいだが、Cの筆者は、そうは思っていない。時代や、文章を書いた筆者によっては、一つの出来事でも捉え方だけでなく、出来事の内容自体までもが変化している。

#### 生徒まとめ1-2（A組SI）

兼方の悪口は、一見激しく見えるが、その悪口にもきちんと筋は通っていて、通俊が間違っただけを言っているのがどの書物でも明らかに分かる。しかし、語り手の感じ方はそれぞれ違って、多少の脚色も交えながらも、兼方や通俊への思い入れが、それぞれはっきりと表明されている。事実に語り手の意志を含ませて、二人の人格まで変わるほどに、自らの意見を伝えようとしている。

#### 生徒まとめ2-1（A組HS）

この出来事自体は非常に単純なものだが、その背景はとて複雑だ。筋が通っていて、もっともなことを言っているのは兼方だが、BやCの文章では良いように書かれていた通俊も、否定はできないような気がする。しかし、私はどちらかという兼方の肩を持ちたい。Cの文章でも書かれていたように、昔が良くて今が悪いという考えはおかしいと思う。昔は、絶対に兼方のような人物はいなかったと思うが、その歴史を気にせず偉い人に立ち向かっていく兼方は立派だと思う。世間知らずの兼方からも、そういったことが学べる。型にはまったものだけが正しいのではないと思う。そしてそれは何百年も前も、今も、変わらないことだと思う。

#### 生徒まとめ2-2（C組TJ）

兼方が通俊に悪口を言ったのは、一般的には正しい、と思われる。今は、昔のように身分の差が激しくないからでもあると思う。今と昔の思考の違いをとて感じた。また僕は、ここで正しいとか正しくないかを考えるのではなく、兼方が悪口を言うべきだったのか言わない方

がよかったのか、ということを考えたい。兼方は、自分の歌が入らなかったことにカッとして言ってしまった。確かに言っていることは正しいのだが、通俊が世間の反感を買うことになり、国のまとまりにも影響が出てしまうので、ここは我慢するべきだったと思う。

#### 生徒まとめ2-3 (A組SR)

私は、この事件において、兼方の味方に近いと思う。時代の背景上、身分の低い者は高い者に従うのが社会のルールとなっている社会の中で、自分の意見をはっきりと言った兼方は勇気があり、共感できるからだ。しかし、この事件で勝ったのはどちらか、と聞かれると、はっきりと答えることはできない。論理的に正しいのは兼方だけれども、この時代の「身分」は絶対的なものであり、通俊はこの時代のトップクラスの権力者であったからだ。このように意見がはっきりと決められないのは、「自由」「平等」を大切にす現代と、あまりにも差がありすぎるからだと思う。

#### 生徒まとめ2-4 (A組YM)

語り手が視点を変えることによって私たち読み手は、それぞれ印象に残る部分が違う。兼方派は、地位が低くても正しいことは正しい。通俊派は、なんと言ってもやっぱり『後拾遺集』の撰者になるほどだし、兼方に対しての言葉は少し間違っただけ、とってしまう。読み手は、「地位」と「論理的」というキーワードで「兼方の悪口」を受け取っているのだと思う。

#### 生徒まとめ2-5 (C組MR)

A『宇治拾遺物語』の作者は、この出来事をただそのまま書き出し、それを読む読者が自分でどちらが良い悪いを決めさせようとしているのだと思います。BとCの物語ではどちらが悪いのか良いのかははっきりと書かれていて、「ああ、作者はこう思っているのだな」ということが分かったが、Aの文ではどちらが悪いとも良いとも言っていない。このような文を読むと、読者は自分の想像でどちらが良いか悪いかを理解する。そうした方がはるかに気持ちがいいからです。詳しく言えば、自分の願望が、「ああ、この人はこんな人であってほしい、そうに違いない」というものによって解釈するのです。作者は、こんなふうに文を書くことによって、一人一人みんな捉え方が違う、ということを示したかったのだと思います。

生徒まとめ1の二つの例に見られるように、生徒の「読み」のレベルは、説話内容の類似や相違点の指摘だけに留まらず、語り手の視点を意識した読み方にまで到達していることが分かる。これは、授業展開や問題の設定などで「比べ読み」を通して、語り手の視点(視点の違い)を意識化した成果であると思われる。

また、生徒まとめ2の各例に見られるように、生徒の

「読み」のレベルは、語り手の視点を正しく捉える(物語の内容を正確に読み取る)というだけでなく、その語り手の視点を現在の自分の意識と関連づけながら読む(自分自身を読む)という段階にまで発展していることが分かる。まとめ2-1、2-2のように、語り手の視点に対して現在の自分のものの見方を明確に意識化したものや、まとめ2-3、2-4のように、時代背景などをふまえた上で語り手の視点と自分の意識との関係を相対化して捉えたものが、多く見られた。さらに、まとめ2-5のように、「読み」のあり方を、テキストを通しての語り手と自己との対話であり、また、自己の投影でもあると捉えることができる生徒も見られた。

最後のまとめの授業では、これら生徒の意見をそれぞれ発表させながら、指導者が互いに関連づけを行なう形で進めた。このような授業展開では、最後のまとめの時間に、生徒に書かせたものをどのように整理・評価するのが重要である。生徒個々に表現(記述)の仕方であっても、共通する意見や対立する考えについて整理し、位置づけてやる。また、それらを集約したり発展させる方向性についても、生徒の意見の中から見つけ出して評価する。自分や友人の意見ということで生徒も大変熱心に聞き、この時間の成果で、クラス(授業)での「読み」の現状と方向性を、生徒一人一人が自分のものとすることができた。

### 3. 『平家物語』の授業

前述「説話」の授業からの応用・発展として、テキスト受容のあり方や、主体的な読みのあり方を考えさせるための授業を、「説話」よりも長く、内容表現の複雑な「物語」を題材に用いて行なった。具体的には、『平家物語』諸本間の比較・比べ読みを通して、「物語が、語り手の視点によって描かれていること、また、読み手のものの見方によって捉えられていることを自ら意識する」ことを目標としたものである。

『平家物語』から、題材として「敦盛最期」と「河原兄弟討死」の二つを取り扱った。「敦盛最期」は、教科書「中学校国語2」(学校図書)掲載の覚一本系本文をA、『延慶本平家物語』「第五本二五敦盛被討給事」をBとして、いずれも全文口語訳付プリントを作成して、音読からはじめて全6時間で実施した。また、「河原兄弟最期」は、覚一本系本文巻九(岩波新古典文学大系)をA、「百二十句本平家物語」八七、梶原二度の駆け(新潮古典集成)をBとして、これもいずれも全文口語訳付プリントを作成して、同じく全3時間で実施した。

「敦盛最期」の「比べ読み」授業の実際の様子は、以下の生徒「学習記録」を参照。

### 生徒学習記録（5時間目）（A組YR）

今日の授業では、「敦盛の最期」のAとBの文章を比べることで、違いを探し出していくことをしました。まずBの文章では、戦いを詳しく具体的に書いていたり、頼朝（兵衛佐殿）を尊敬していることなどから、直実は、忠誠心の強い、恩賞をもらうのにも必死な、「いかにも武士な人」として描かれています。一方の敦盛は、きれいな体つきをしていて文章も上手で「いかにも貴族な人」として描かれています。Bでは、武士と貴族とは、交わることのない別物として描かれていました。しかし、Aの文章では、直実は、最初は「いかにも武士な人」であったのが、だんだんと優しい気持ちへと変化していき、また敦盛も最初は「いかにも貴族な人」であったが、すごく強気な誇り高い人というように変化？していることから、二人の気持ちは近づいてきていて、Bのように全く別ものではないことが分かりました。

AとBの文章の主な内容は、同じです。けれど伝えたい内容は違う、と思います。Aの文章では、「優しさ」は身分には関係のないものであることを伝えなかったのだと私は思います。

「比べ読み」の授業では、全文口語訳付きプリントとは別に、記述に対応してテキストABを上下二段に配した作業プリントも用いた。作業プリントでは、Aの敦盛の台詞「さては汝にあうては名乗るまじいぞ。汝がためにはよい敵ぞ。名乗らずとも頸を取って人に問へ。見知らうずるぞ」や、Bの直実の台詞「兵衛佐殿の仰せに『よき敵討ちて参らせたらん者には千町の御恩あるべし』と候ひき。かの所領すなはり君より賜はりたりと存じ候ふ。」など、比較対照の明確な部分を十カ所ほど空欄にして、生徒自身に記入させながら、それぞれの表現に即して語り手の視点を理解する、という学習活動に2時間を費やした。この学習では、「語り手の視点」と「読者（生徒）のもの見方」の比較という軸と、諸本間の異同比較という軸と、読みの過程が二重になっているが、この時間をかけた成果で、学習記録にも見られる通り、生徒はそれぞれのテキストの内容を正しく理解した上で、語り手の視点の違いを表現に即して具体的に読み取ることができた。

以上のような学習活動を経た後、課題（まとめ）として、『語り手のもの見方』を『私たちのもの見方』から『批評』する」という内容で文章を書かせた。中学2年生には多少難解な『批評』という言葉をやさしく用いたのは、「敦盛最期」で、語り手はどのように表わし、私たちはどのように受け取っているのかという問題について、ただ違いを述べるだけではなく、読者として語り手と向き合うという姿勢を意識しながら書かせるため

ある。

この課題（まとめ）についても、クラスに紹介し評価することで、授業全体のまとめとした。以下にいくつかを抜粋して紹介する。

### 生徒まとめ-1（C組MK）

Aでは「武士らしさ」や「貴族らしさ」という、いわゆる固まった考え方を取り払っている。しかし、読み手である僕たちが「らしさ」を持っているから、初めはよく意味が分からなかったのだ、と思う。しかしよく考えてみると、これだけの人が全て「らしさ」に当てはまっているはずはない。その「らしさ」ではない共通部分を、語り手は書きたかったのだと思う。Bでは「らしさ」というものを中心において表わしている。（僕は）その「らしさ」を肯定する立場なので、Bの方が好ましく思えた。その個々のイメージをこわしたくないから、とも言い換えることができる。

### 生徒まとめ-2（B組OY）

二つの物語の中で私は、武士である直実と貴族である敦盛が近づくように描かれているAの方が好きだ。私の好きな方の話では、直実は人間味のある武士として描かれ、敦盛は勇気と誇りを持っている貴族として描かれている。私はこの話を読み、身分などに関係なく人間はこの二人のようであって欲しいと自分が考えていることを発見した。この二人の人物像（人間味があり、また勇気と誇りを持っている）を理想としていると思う。反対にBを読んだ時、直実が自分のことばかり考えていていやだなあと思った。この話の中で直実は武士の鑑として描かれているので、自分の利益にこだわる武士っていやだなあと、自分が思っているのだと思った。

### 生徒まとめ-3（B組SK）

敦盛のような貴族、直実のような武士は、私たちのイメージからみると、貴族は威張って偉そうにしている、だけど心の弱さがあるようなイメージである。武士は強くて威張っていて、だけど貴族とは違い、上の者の命令に背かず人殺すような心の強さを持っていて、貴族は「へにゃへにゃ」、武士は「がっしり」というような、元々からのイメージがある。しかし「敦盛最期」を読むと、貴族である敦盛が、死ぬ覚悟ができていてたくましいが、逆に武士である直実は、なかなか敦盛を殺せずに心が乱れている。この様子を見ると、武士である直実も、人が死んでしまう悲しさというような人間味のある心を持っているんだな、と感じる。しかし、そう感じてしまうのは、私たちに入っている元々のイメージがあるから、そう思ってしまうのだと思う。直実のような武士でも、敵の死を悲しむ者はいるし、敦盛のような貴族にも、ちゃんと自分の意志を貫いていこうというきっちりした貴

族もいる。自分達のイメージによって、その物語の読み方も変わらと思う。

生徒まとめ-4 (B組KR)

「敦盛最期」という物語Aでは、直実は武士ではなく情のある貴族（貴族に本当に情があるかは不明だが）のような人間として描かれ、敦盛は武士のような誇りを持つ人間として描かれている。ところがBでは、武士は武士、貴族は貴族として描かれている。しかし、これは私たちが「武士とは」、「貴族とは」何たるものかを、自分たちで決めてしまっている故に、そう読み取ってしまうのであろうと思う。「武士とは、将軍に忠実で、戦いによる利益のために戦っている」、また、「貴族とは、美しく優雅である」、そういうイメージがあるから、「語り手はこのように描いている」と思っているのであろう。このイメージを作ってしまうのは、また別の物語や、他人からの影響だと思う。しかし、このように考えると、実は「語り手が語りたかった物語」と、「私たちが読んだ物語」とは違うものなのかもしれない。つまり、語り手の視点と、私たち読み手の視点と同じとは限らないからである。物語AとBとで主人公の性格に差が出てしまったのは、それぞれの書き手の思い・イメージ・視点の違いにより生じたズレであると思う。それに加えて、私たちの視点によりズレが生じてしまっても、私はそれはそれで面白い、と思う。

生徒まとめ-5 (A組TT)

最初はBの方が読みやすかった。直実と敦盛の間に複雑な関係もないし、読んでいて言葉の隅から隅にまで気が配られているように感じた。しかし、Aとの関係を深く見ていくうちに、Aには複雑で解こうとしても解くことのできない何かがあるのだ、と思うようになった。その「何か」の中には、当時のおきてなどによって制限され続けていた、直実や敦盛の気持ちがあるのだと思う。Bを読むと、Aでは瞬殺だった戦いの場面が「上になり下になり、三離れ四離れ組みたれども、つひに熊谷上になりぬ」などとあるように、けっこう長くてたいへんな戦いだったと分かる。このように、Bで書かれているのは、読み手をわくわくさせるためのものだと思う。Bは、昔の娯楽のようなものだったのと思う。

生徒まとめ-6 (A組TY)

私はAとBの二つを見ると、Aの方が好きである。Aの方で語り手は、恩賞目当ての武士である直実を異常なほどに泣いているように表わし、陣中に笛を持ち込むほど風雅な貴族である敦盛を、「汝にあうては名のるまじいそ」などと武士らしいことも言う者のように表わしている。つまり直実敦盛両者とも、感情的に書かれていると思った。Bの方は、直実は、とても武士らしい（兵衛佐殿に忠実である）武士であり、敦盛は、貴族らしい（鮮

娟たる両髪は…）貴族であるというふうに、「直実は武士だ」「敦盛は貴族だ」と、戦をとおして完璧に分けてしまっている。つまり、語り手は武士と貴族はこうも違うものだ、と言っているのではないか。立場について書いているBより、私は感情的に物語を表わしている（直実がさめざめと泣いている）Aの方を好む。

まとめ-1に取り上げた生徒は、「敦盛最期」Aを読んだ初発の感想では次のように述べていた

「二人とも非常に分かりにくい。直実は親子の情に目覚めた点では少しは分かる。しかし敦盛は全く分からない。無駄に豪華な装備で現われ、『招かれてとって返』し、直実には『頸を取れ』としか言わない。誰にとっても命は大切だ。でも彼は逃げなかった。『勇気』とかそういうわけではない。死を覚悟していたのだろうか。二人は立場も地位も違う。しかし、二人が出てくることで、直実の心情の変化が分かりやすくなる。敦盛の奇妙な行動より、直実の心情の変化に重点が置かれている。戦いは悲しいものだ。守りたくても殺さなければならない。それをも言いたかったような気がする。」(C組MK)

文学的文章の読解が苦手だと思っている生徒にとって、親子の情愛や生き死にの限界状況という「テーマ」を読み取る（読み取らなければならない、と思ひ込む）のは「分かりにくい」ものであって、テーマの方に自分を当てはめておしまいにしてしまうということが往々にして起こる。今回の学習で、この生徒は、自分の「読み」の傾向に気づくという経験をした。この経験をもとにして、「自分を読む」という新たな読みの方向を深めさせて行きたい。

まとめ-2、-3に見られるように多くの生徒が、語り手の視点を正確に捉える（物語の内容を正確に読み取る）だけでなく、その語り手の視点を現在の自分のものの見方と関連づけながら読む（自分自身を読む）段階、さらには、テキストを読むことで自分自身を明らかにするという段階にまで到達できた。さらに、まとめ-4のように、「物語」と「自分の読み」との相互作用や対立関係から、私たちにとっての「読む」ということの本質について考えることのできる生徒もいた。（特に、このまとめ-4の意見を読ませた時には、クラスの中に感心のため息もれた。中学2年生にもなると、友人の優れた意見は十分に評価できるものであった。）

また、まとめ-5、-6のように、語り手の視点について考える中で、諸本（テキスト）の性格や特徴について言及した生徒が多く見られた。今回の学習では、中学校段階での古典学習であることを考慮して、諸本の系統などについての知識はもちろん、「覚一本」「延慶本」などの用語も一切用いずに授業を行なった。その中でこの

らのまとめは、中学生風の語彙や表現ではあっても、テキストの本質につながる指摘として位置づけることができるものである。この『平家物語』の比べ読み学習は、より高次の学年で、焦点の当て方や取り上げ方によっては、別の可能性も持っていると思われる。

#### 4. まとめ—国語科におけるリテラシー—

「敦盛最期」の応用問題として「河原兄弟最期」を読んだ後、「私たちにとって、『文章を読む』とはどういうことなのか／『古典を読む』ことの意味はどこにあるのか」という内容で文章を書かせて、学習の総まとめとした。今回の学習の成果として、「読み」の構えを問うものである。以下に代表的なものを抜粋して紹介する。

##### 生徒まとめ-7 (A組HS)

私たちは文章を読むことで、自分の知らない世界に足を踏み入れることができるのだと思う。古典は特にそうだ。源平の戦いなんて、歴史の勉強でしか知らない。しかしこういう文章を読むことで、私たちからはこんなに離れた世界の人の気持ちを考えることができる。自分と合わせて考えることができる。そうやって考えることで、どんな人からも自分との共通点、違うところ、学べる場所が見つけられるのだ。それが、その時の自分にプラスされてゆき、さらに考えを拡げる。様々な文章で自分が気に入った考え方、それが合体していき、自分の価値観だとか主義だとか、そういったものになっていくのではないだろうか。こんな人物になりたいと思い、自分の生き方と言ったら大げさだが、そういったものが定まっていくのではないだろうか。私たちにとって「文章を読む」ということは、自分自身を定めていくものだと思う。

##### 生徒まとめ-8 (A組IS)

僕は「文章を読む」ということは、他者の考えに触れて、それを自分がどう考えるかによって自分のものの考え方を知ることだと思う。他者の文章を読み、自分が「それは違う」と考えれば、その人と自分の考え方は違うと分かり、他者の文章に共感できれば、自分のものの考え方とはこういうものなのだと実感することができる。また、「文章を読む」ということは、他者の考えを知り、自分の考えを深めさせていくことができることでもあると思う。つまり、「文章を読む」ということは、一見他者の考え方だけを読むことのようにだが、実は自分の考え方を一緒に読むということでもあるのだと思う。

生徒に限らず、私たちにとって、「自分で」読んだり考えたりした内容だと思っているものが、実はどこかで拾ってきたり知らない間に摺り込まれてしまった「他者の」

意見や価値観の再現であったということは、間々あることである。もっとも、「他者の」意見や価値観であるとしても、だから自分を抑圧し征服する負の存在だとは限らない。自らも同様にかくありたいと願っている理想や良き規範の表れである場合もあり、一概に否定すべきものではない。それはやはり、「自分で」言葉にすることによって、「他者の」意見や価値観は、本当に「自分の」ものになるのであろう。これら無意識の内の、知らない間に身についた価値観が、普段なかなか言葉になりにくいものでもあることからしても、なおさら「自分で」言葉にすることが求められるのである。

国語の授業で求められるリテラシーは、この過程を経験することによって得られる力である。「読む」ことに即して言えば、テキストを通して「自分が」どのように読んだのかを「自分で」言葉にすることである。それを「リテラシー」「言葉の力」「読解力」とどのように言おうが同じことであり、また、扱う題材が現代文であれ古典であれ、共通することでもある。